

# 嘉定県城の都市空間と風水思想

盧 永 春\*

## A Study on Urban Space of the County Capital of Jiadin with the Theory of Fengshui

Yongchun LU\*

### 目 次

- |             |                   |
|-------------|-------------------|
| I. 序言       | III. 嘉定県城の都市空間の特質 |
| II. 嘉定県城の概要 | IV. 結語            |

### I. 序言

本稿は、江南水郷地帯に立地する嘉定県城（現上海市嘉定区）<sup>1)</sup>の近世における都市空間の特質を風水思想の影響を中心として解明することを目的とし、地方志などの文献資料と実地調査成果に基づいて考察を加えるものである。

嘉定県城の都市主要構造は南宋嘉定10年（1217）に創築され、その城郭や主要な都市施設などはほぼ明代中後期において完成したと想定でき、それ以来ほとんど変わらぬまま後世に伝えられていると考えられる。嘉定は蘇州デルタ地域の古岡身<sup>2)</sup>の外縁に立地しているため、潮の干満現象がみられ、都市空間にもその影響があると考えられる。

江南水郷地帯の都市研究は、地域の主要な大都市である蘇州やそれと対蹠的な周辺の市鎮すなわち地方中小都市に関するものが多い。しかし、それらの中間に存在し、地域の政治・文化・経済の中核としての県城については比較的注目されなかったのが実情である。集落地理学からの米倉氏（1987年）<sup>3)</sup>のアプローチがあるに過ぎない。都市空間の構成については、筆者等のこれまでの取り組みがある<sup>4)</sup>。風水思想の影響については、山岳地帯に立地する都市に関する研究報告<sup>5)</sup>がみられるが、江南水郷地帯においては類したものがまだ見当たらない。

---

\* 広島大学工学部 Faculty of Technology, Hiroshima University

## II. 嘉定県城の概要

### 1. 嘉定県城の歴史

嘉定の地は古代の揚州に属し、秦漢の頃、会稽郡婁県に属し、南朝梁天監6年(507)以後は呉郡の昆山県に属した。南宋嘉定10年、平江府(蘇州)に属する昆山東部の五つの郷が県として独立して、その時の年号を県名とし、県城の中心地である練祁市(市場)に県治すなわち嘉定県城を設置した<sup>6)</sup>。

練祁市は、地域の主要水路である練祁塘(東西方向)と横瀝(南北方向)が交差するところいわば十字港に形成された水市(港町)である。当時では百戸たらずの小さな水市<sup>7)</sup>で、その中心を占めているのは南宋開禧年間(1205-1207)に建立された七重の仏塔(法華塔、通称金沙塔)<sup>8)</sup>である。万暦『嘉定県志』(卷二、疆域考下・津梁)では、南宋嘉定年間から咸淳年間(1265-1274)にかけて城内に架けられた橋で、創建年代が明記されたものは9基が数えられる<sup>9)</sup>。それらは、県城の中心部(県治や学宮など)付近に集中していたが、主として城内の主要水路や街路に架けられたものであった。したがって、南宋の嘉定県城は十字形水路に沿って従来の街路を県城の主要街路に改造し、この時点においてすでに後世にみられる城内の水路と街路の関係すなわち都市主要構造が確立されていたと推測される。そこには、法華塔を中心に北側は県治(嘉定11年营造)、南側は学宮(嘉定12年营造)や城隍廟(嘉定年間营造)などが配置されていたことが分かる。また、県城の形状や規模などの詳細は不明であるが、万暦『嘉定県志』(卷三、营造考上・城池)によると、嘉定12年に磚で覆った城壁が造られていた<sup>10)</sup>という。

元至元年間(1264-1294)の中頃になると、江南の米などを海運で大都(北京)に送るため、嘉定の北境に位置する劉家港が江南一の海港として急成長した。それに応じて嘉定も南宋の防備の要地から海運の要衝へと変身した。万暦『嘉定県志』(卷一、疆域考上・郷都)に、嘉定邑はもともと五郷から成り立っていたが、往時は毎年十余万(石)の漕糧を儲えるために郷単位ではなく五郷を管轄する四倉で民を領したので、民はその郷を忘れた<sup>11)</sup>という。当時嘉定の人口増が著しく、それによって元貞2年(1296)に州となり、嘉定県城は州城に変わり<sup>12)</sup>、至大2年(1309)に州治が増築された。宋元時代では仏教が盛んで、元代になって海運が開かれるとますます隆盛となった。中でも州治の東北に位置する円通寺が高い地位を有していた<sup>13)</sup>。城内の水路や街路、橋などの都市施設の整備が行われた。嘉定現存最古の橋は元代に造られた石拱橋(石造アーチ橋)の永寧橋〔通称円通寺橋、至正2年(1342)創建〕と普濟橋〔すなわち通濟普福橋、旧名東市橋、通称管家橋、至治元年(1321)創建〕である。また、城内水路の石駁岸(石造護岸)が築かれた早期の

記録としては、至正17年（1357）の学宮の横瀝沿い護岸に関するものがある<sup>14)</sup>。元代は天下の城郭を廃止したので、嘉定も州治の所在でありながら城壁がなかったようである。至正18年（1358）に、平江（蘇州）一帯を制覇した張士誠が部下呂珍を遣して石と磚で城壁を築いた。その規模については、万曆『嘉定県志』（卷三、營建考上・城池）によると、城壁の周囲は1694丈、高さは1丈5尺、基礎の幅は4丈、上端の幅は3丈で、東西南北の各方位に四つの陸門を開くほか、東西南に三つの水門を設け、外城濠は城壁から5丈控え、幅は13丈、深さは1丈で、内塹（内城濠）の幅は2丈、深さは1丈である<sup>15)</sup>という。

明洪武2年（1369）、嘉定州は県に戻された。明代前期において、元代からの海運や徽州商人の活躍によって、県城とその周辺の市鎮は経済の繁盛を見せた。元末明初の嘉定を知る資料として明の洪武年間（1368-1398）に成立した『蘇州府志』所収の『嘉定県界図』（図1）が挙げられる<sup>16)</sup>。それによると、城壁は円形になっており、四方に水陸の城門が開かれ、城内の主要施設は北に県治を中心にして左右に察院と館駅、南に文廟、惠民薬局、税課局、東に城隍廟、西に三皇廟が配置されている。館駅や税課局が置かれていたように、明代初期には海運がまだ盛んであったことが窺える。永楽12年（1414）に大運河が全通し、その翌年に海運が全面廃止となり、嘉定城内の館駅や税課局もそれぞれ改組された。明代

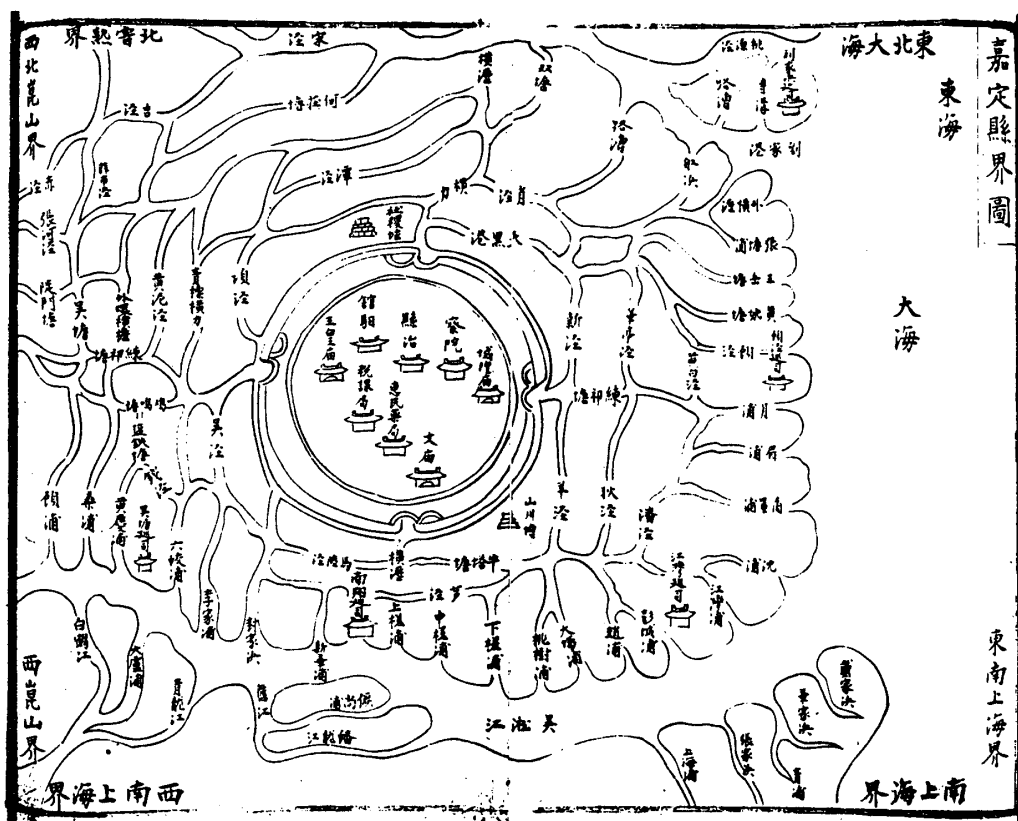


図1 洪武『嘉定県界図』（洪武『蘇州府志』所収）

初期、都が金陵（南京）に置かれると、嘉定は再び防備の要地に復帰した。特に明代中後期の嘉靖年間（1522－1566）の倭寇の乱において、嘉定はその前線地域となり、被害も多かったとされている。そのために嘉靖32年（1552）に海防庁<sup>17)</sup>が特設され、それを機に嘉定県城の城壁等を新たに築いた。その規模は、万曆『嘉定県志』によると、城壁の周囲は2266丈6尺、高さは2丈6尺、基礎の幅は5丈、上端の幅は3丈であった。さらに翌年から三年をかけて城壁の修繕をした。城壁の上端の女牆を2369個まで増し、高さも4尺増加し、また、敵台16箇所、守舖（兵士の休憩所）34間等を建築した。四つの城門の上はそれぞれ楼を建設し、東と北の水門も広くし、南門、西門、北門の外側に三つの子城を築き、東門外にあった子城も増築した。また、外城濠の深さと幅も増した<sup>18)</sup>という。こうして、嘉定県城は東南の雄城を誇った<sup>19)</sup>。明代の嘉定県城は、城壁の築造のほかにも都市施設の改修・整備が盛んに行われていた。例えば、城隍廟の移築、法華塔の修復、学宮の改修、北水門の増設、南水門の移設、役所の再建、石駁岸の修造、街路や橋の修復・新築などが挙げられる。これらの一連の営造活動は、明代中後期以前の嘉定の豊かな経済事情にもよるが、その背後には科挙の文運の高揚が狙いで、特に風水思想の影響（詳しくは後述する）がみられる。万曆『嘉定県志』（巻四、宮建考下・坊巷）によると、万曆（1573－1620）中期の嘉定城内の主要街路は5本（東西南北の大街と新街）、巷は41本を数える。清光緒年間（1875－1908）の街路数と比較してみると、光緒では城南は14本、城北は9本、城東は6本、城西は17本の街巷があり、街路の総数が明代の万曆年間の記録と一致していることが分かる。また、万曆年間の県城の坊（橋詰め、埠頭、門前、巷口などに位置する）は79と数えられる。また、万曆『嘉定県志』（巻五、田賦考上・戸口）によると、元至元27年（1290）に95,795戸、373,755口で、明正徳7年（1512）に91,779戸、352,103口と元代から明代にかけての増減の幅が比較的小さいことが分かる。しかし、嘉靖年間（1522－1566）の倭寇の乱もあるが、特に万曆年間の全国的な自然災害によって、嘉定の人口も著しく減少し、万曆29年（1601）では、44,168戸、118,370口となっていたことが分かる。嘉定は明代中後期以降になると衰退の道を辿ったようである。さらに清順治2年（1645）に起こった「嘉定三屠」（清兵による三回の大虐殺）で嘉定県城が空城となり、各種の都市施設の破壊も大きかった。その後は復興したが、明代の最盛期の姿をみることはできなかった。

したがって、元代初期から明正徳年間にかけては嘉定県の全盛期であったとすることができ、嘉定県城の完成期はほぼ同時期と考えられる。

清代の嘉定県城は地域の政治・経済・文化の中心地としての地位を保っていたが、周辺の諸都市と比して経済的に発達せず、主として明代から引き継がれた学問の風潮が強く、特に乾隆・嘉慶年間（1736－1820）の学界を制覇した考拠学（考史学）の本拠地として知

られていた。ところで、同治元年（1862）の英仏連合軍による太平天国の鎮圧で嘉定は再び空城と化した。漸く復興したのは光緒年間になってからである。しかし、康熙『嘉定県志』や光緒『嘉定県志』から、嘉定県城の都市施設はほとんど明代のそれを継承したことが分かる。嘉定の歴史的都市施設の多くは光緒期において修復あるいは再建されたものである。

## 2. 嘉定県城の都市立地

### 地形の特色

嘉定県城は太湖平原の古岡身の周縁部に位置する地域の中核都市である。県城の北は劉河（婁江）、南は呉淞江、東は海という三方を水面に囲まれた水郷地帯（図2）であり、地域の主要水路練祁塘（東西方向）と横瀝（南北方向）が県城のほぼ中央で交差する。嘉定県城の都市立地の特色は、古岡身にあるため地勢が高く、かつ地形が平坦にして潮汐の影響がみられることであって、その点で古岡身の内側の都市（例えば蘇州）との相違がみられる。嘉定県城は太湖平原の北東域（沿海地域）から蘇州、昆山へ行く水路の要所にあたり、往来の商船は城内を通過したので都市人口が密集し、商業も繁栄した。

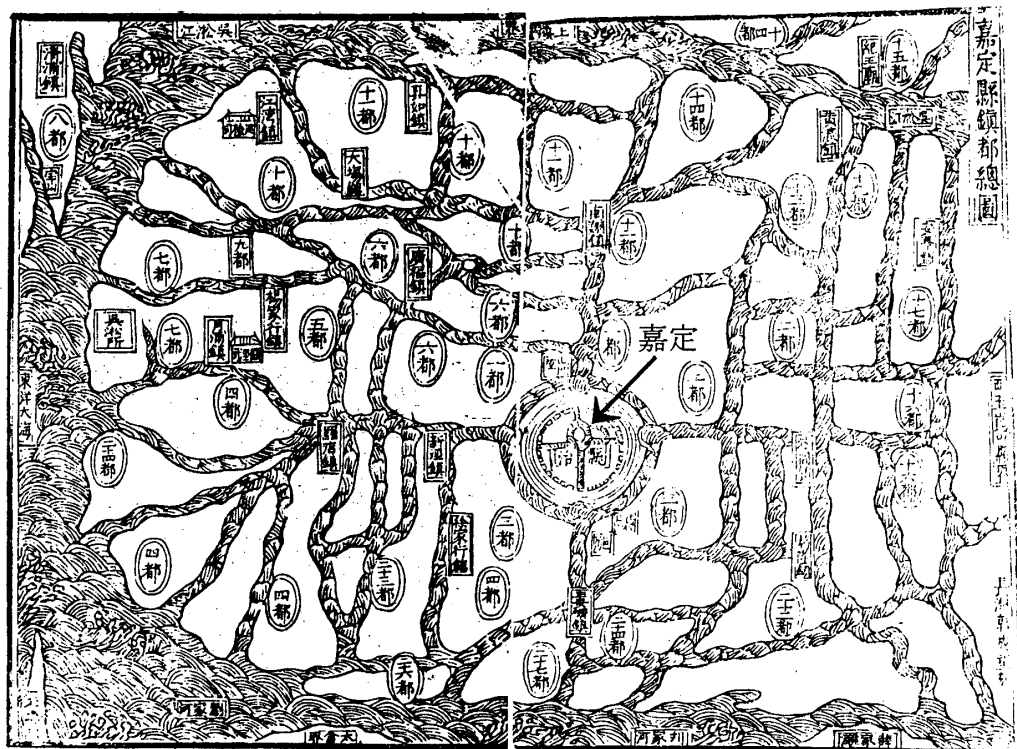


図2 万曆『嘉定縣鎮都總圖』（万曆『嘉定県志』所収）

## 周辺の市鎮との関係

嘉定県城の北の劉家港という江南随一の港湾、西の蘇州府城と南の松江府城という江南の大都市に囲まれた独特な地理的位置を占めており、これらの地域との交通はこの練祁塘と横瀝を主要な経路に利用した。水上交通に恵まれたため、嘉定県城を中心に周辺地域の市鎮も元代から明代にかけて発達を見せていた。したがって嘉定県城は水路網で結ばれた水郷都市のネットワークの中核に位置していた。

万曆『嘉定県志』（卷三、宮建考上、学田所収の『郡人周鳴鳳学田記』）に、嘉定は郡城（蘇州）から140里、東は海に瀕し、郷聚をもって鎮となす。そのうち名のあるものは16あり、その最大の大鎮は南翔、婁塘、羅店で、それぞれ1500戸余りを率いる。それに次ぐ中鎮は大場、江湾、高橋、月浦、真如、安亭で、戸はその半分である。そのまた次は小鎮の広福、黄渡、紀廟、外岡、葛隆、楊行、徐行で、それでも300戸余りであり、いずれも水陸交通の会するところで、商人が集まり、風俗は商品を重んじる<sup>20)</sup>という。

前掲の『嘉定県鎮都総図』によれば、大鎮は、嘉定県城の南門・東門・北門からそれぞれ約20里を離れ、県城とは地域の主要水路練祁塘と横瀝で結ばれている。中鎮は、県城との距離はほぼ大鎮の倍を有し、小鎮はそれらの中間に点在するような配置上の特徴がみられる。このように、嘉定県城の周辺の市鎮は、練祁塘と横瀝の水路沿いにほぼ等間隔に形成されていたことが分かる。こうして、県城は周辺の農村地帯から孤立した都市ではなく、その周辺に形成された市鎮のネットワークの中に位置していたといえる。

## III. 嘉定県城の都市空間の特質

前述したように嘉定県城は、宋代に創築されて、元代に海運の要衝として発展を遂げた。それを基礎として明代中後期に都市の体裁を整え、後世にみられるような空間構成の特質が成立したと考えられる。本稿においては、次の二つの点から考察を加えたい。一つは嘉定の都市空間の構成についてで、もう一つはこのような都市空間の形成要因として風水思想の影響についてである。

### 1. 都市空間の構成

#### 『県城図』にみる都市主要構造

嘉定県城の都市主要構造は、光緒『嘉定県志』に掲載された『県城図』（図3）に示されているように、円形の城壁と内外城濠に囲まれ、四方に水陸の城門を設け、南東方位にもう一つの水門がある。城内の水系と城外の水系は、地域の主要水路練祁塘と横瀝によっ

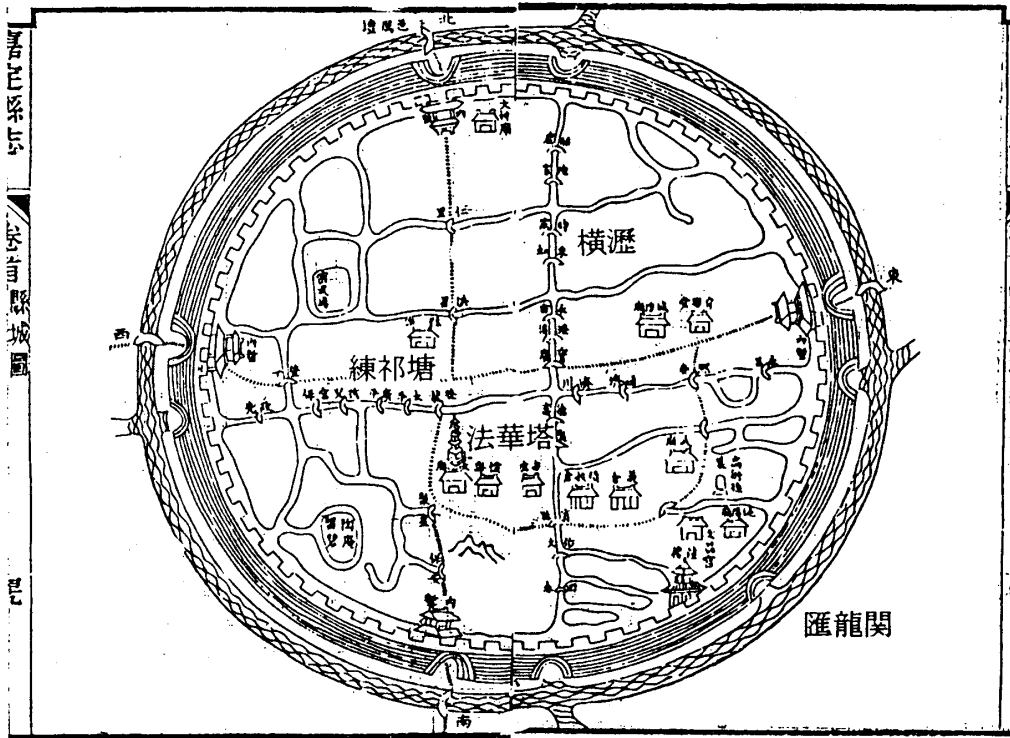


図3 光緒『県城図』（光緒『嘉定県志』所収）

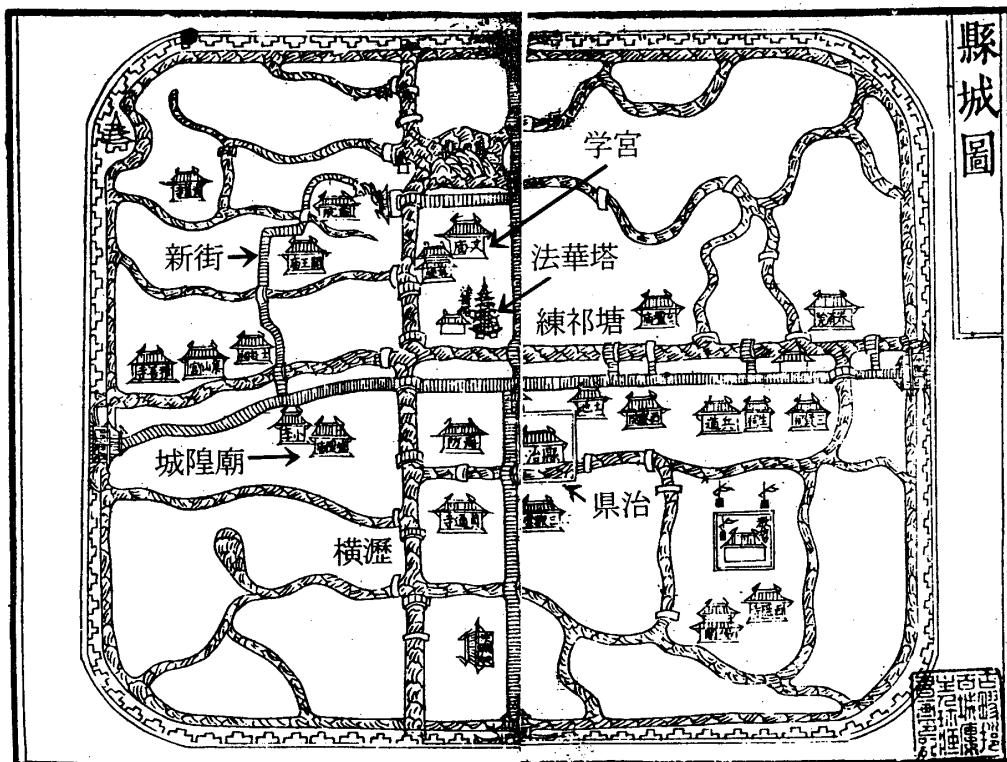


図4 万曆『県城図』（万曆『嘉定県志』所収）

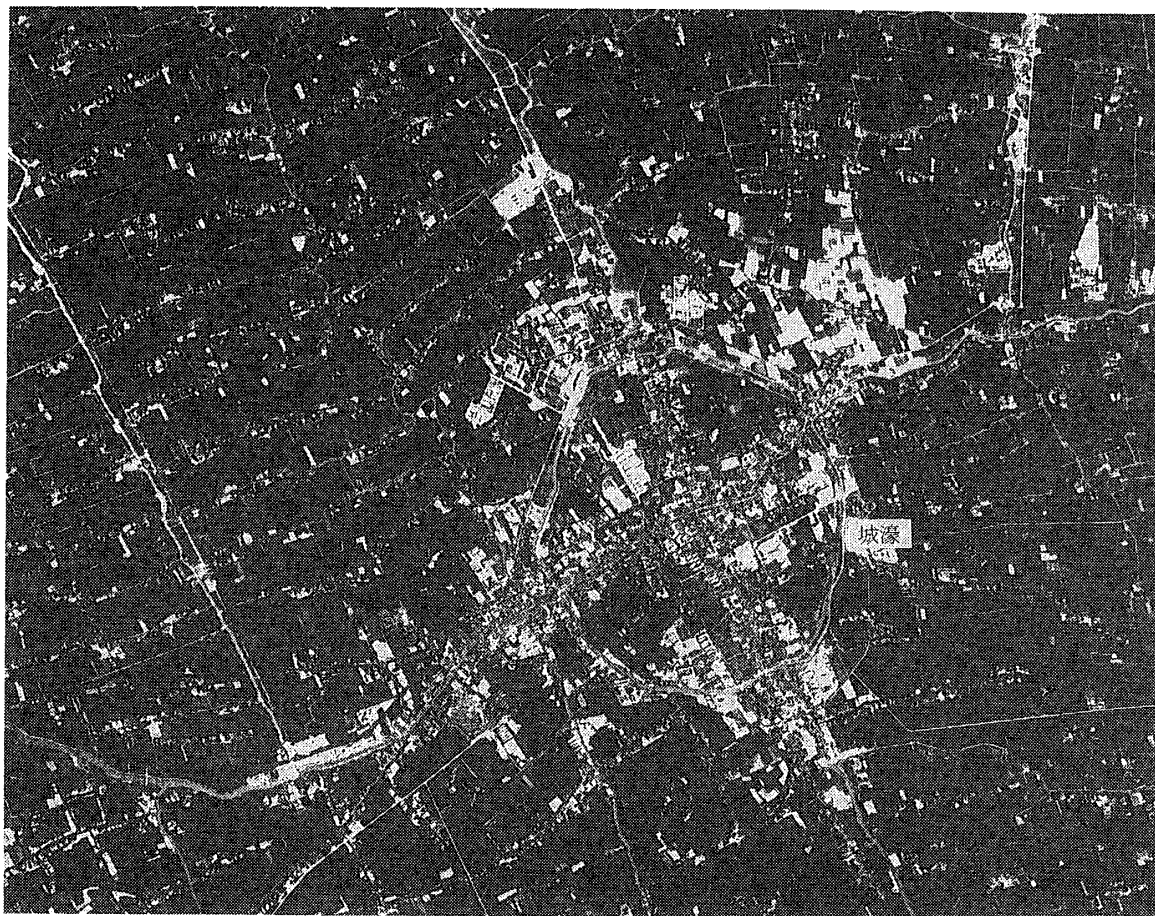


写真1 嘉定の衛星写真(1967年)

て連結されている。この二大水路<sup>21)</sup>は県城のほぼ中央(横瀝はやや東側に寄っている)で十字形に交差している。十字形水路の交点に七重の法華塔が建っており、建立当時では練祁市の象徴であり、水路交通の目印にもなっていたと考えられる<sup>22)</sup>。このような水系に対応する形で、城内の主要街路は水路に並行して通され、水路の両側に大街と小街(巷・街)<sup>23)</sup>が配置され、蘇州府城の空間構成にも通じるところがみられる。また、学宮と城隍廟との間に一本の街路(万曆『嘉定県志』には新街と呼ばれている)が通されている。これらの主要街路は万曆『嘉定県志』所収の『県城図』(図4)にも示されているので、比較的早い時期に形成されたものであると推測される。万曆頃には近世末期にみられる都市構造がすでに完成していたと考えられる。また、市街地は主要水路沿いにしか形成されず、城内には大量の空地が残されており、そこには園林(例えば現存する明代後期の龔氏の庭園秋霞圃)を伴った数多くの大邸宅が構えられ、士大夫等が市中隠の生活を送る格好な場となっていた。このような状況は近年まで変わらなかった(写真1)。



### 街路と水路の位置関係

街路と水路の位置関係からみると、図4にも示されているように、東西方向に通された街路(東大街・西大街)は水路(練祁塘)に近接した形をとっており、南北方向の街路(南大街・北大街)は水路(横瀝)よりかなり離れていることが分かる。

街路と水路が近い位置関係にある練祁塘沿いには商業活動を中心として商店・倉庫・民家などの民間建築と、県治や城隍廟などの公共的施設による帯状の市街地が形成されていた(写真2)。街路と水路が近接することで、水上交通の利便を計ることができる。特に県治・城隍廟の前や橋詰めなどにおいて、水辺の亭・館駅、埠頭広場、水橋<sup>24)</sup>など、豊かな水辺都市空間を演出していた。

それに対して街路と水路が離れている横瀝沿いには、宗教的施設の法華塔院、円通寺、学宮などが配置され、それらは横瀝と街路との間に立地していることに特徴がある。それは東に水路=青龍、西に街路=白虎というように後述する風水思想の影響があったと考えられる。

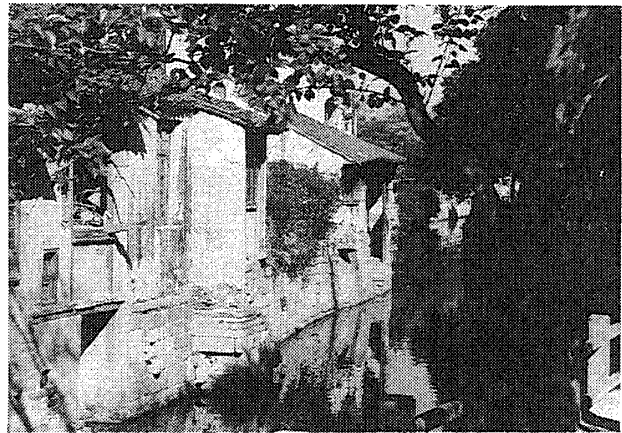


写真2 嘉定城中の水路(練祁塘孩児橋東詰め)沿いの商家 (1988年、筆者撮影)

### 街路や水路の専用化

県治、城隍廟、学宮などの公共的施設においては、街路や水路の専用化現象がみられる。

県治<sup>25)</sup>は、南宋嘉定11年に設置され、登龍橋(通称州橋、京城の中心部にある)の西北側に位置していた(図5)。その大門は練祁塘の北岸に接して通される街路(県前街、現在の城中街)に面する。図4と万曆『嘉定県志』所収の『県治図』(図6)によると、その県前街の路上に坊(牌楼)や亭(四方を吹き放ちとした建物で、ここでは旌善亭、申明亭と呼ばれる)などを設けている。街路上の左右を坊で仕切って、その内側となる大門前面の街路を県治の専用広場化していた。明清時代では行事の際には坊を閉鎖して、通行人は



写真3 嘉定城中の旧県治前の水路(練祁塘)と街路(柵口街) (1988年、筆者撮影)

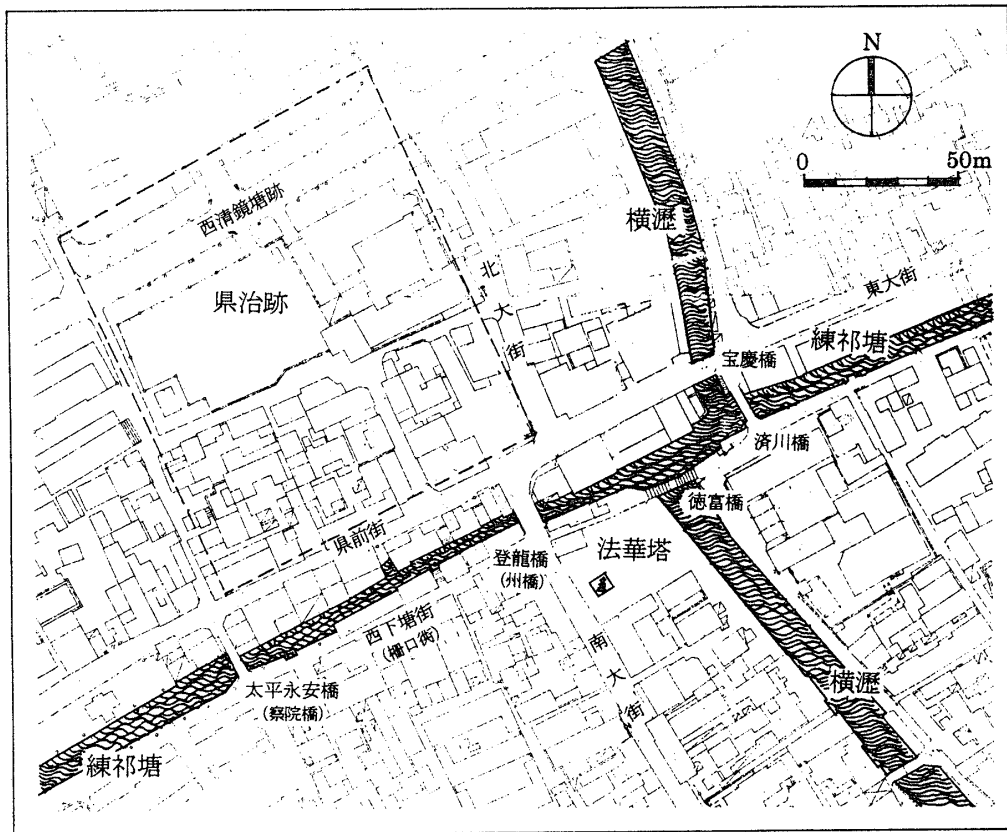


図5 県城中心付近の現状図

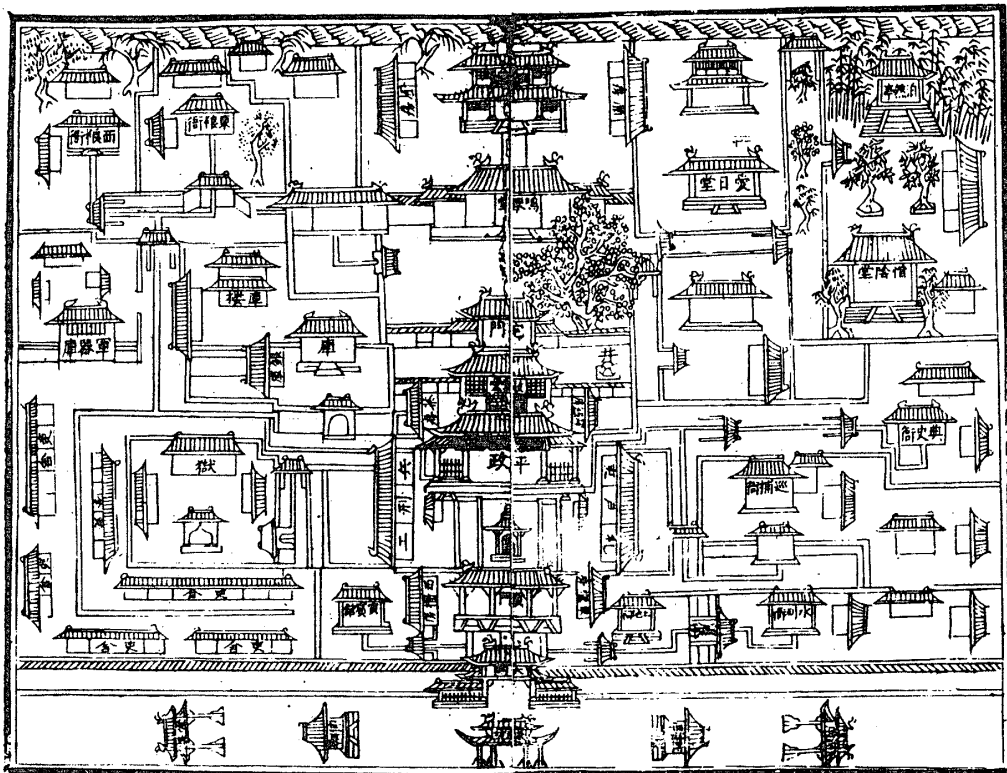


図6 万曆『県治図』(万曆『嘉定県志』所収)

登瀛橋と太平永安橋（通称察院橋）から練祁塘南岸の西下塘街（現在の中下塘街）へ迂回させたいらしい（写真3）。県治前の坊付近に柵などがあつたらしく、中下塘街は現在でも柵口街と呼ばれている。また、県治の北奥部には一本の水路西清鏡塘が構内に通されていた。北奥部は知県の役宅で、水路は主として知県専用の生活用水路であつたと考えられる。

城隍廟は、南宋嘉定年間に造られ、明の洪武2年（1369）に南大街の富安坊から東大街に移築されたものである<sup>26)</sup>。城隍廟前で水路（練祁塘）が大きく曲がっている（図7、写真4）。明清時代の城隍廟は城内最大の盛り場であつて、大きな交易市場が門前に形成され、水辺には広場的空間が展開されていた。門前の東大街には東西両端に轅門（柵に開かれた門）が設けられ、重大な行事（斎醮）の際には、通行人を東の登瀛橋（旧名熙春橋、通称小学橋）、西の普濟橋から東下塘街に迂回させたのである<sup>27)</sup>。また、門前の水路は必然的に廟を訪れる郷民等の船の溜まり場となつていた。

学宮は、南宋嘉定12年に創建され、増築や改修を重ねて明万暦年間に最盛期を迎えた（図8、図9）。それは、南大街と横瀝に挟まれた敷地に南面して構えられ、門前に専用の街路空間を形成している（写真5）。この街路空間は、東の興賢坊（賓興坊）、西の育才坊（儒林坊）、南の高仰坊（仰止坊すなわち旧應奎坊）で構成され、三坊の間は石欄

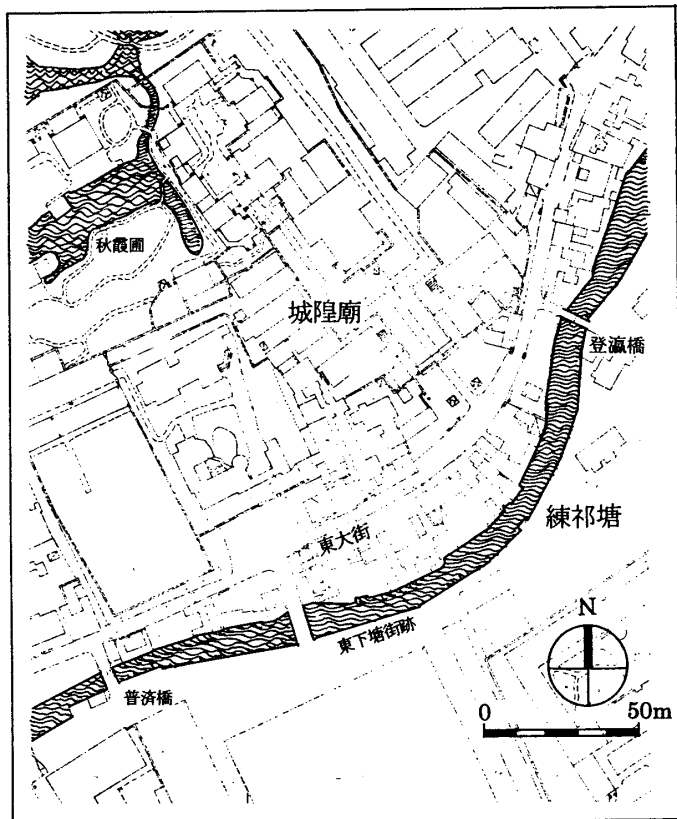


図7 城隍廟付近の現状図

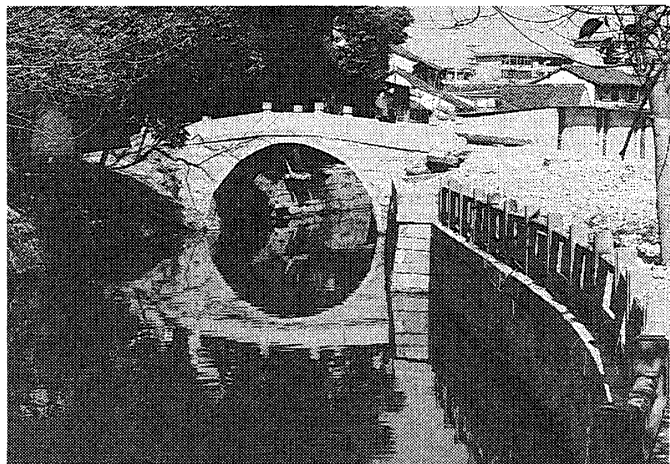


写真4 城隍廟前の登瀛橋（明代の遺構、1997年、筆者撮影）

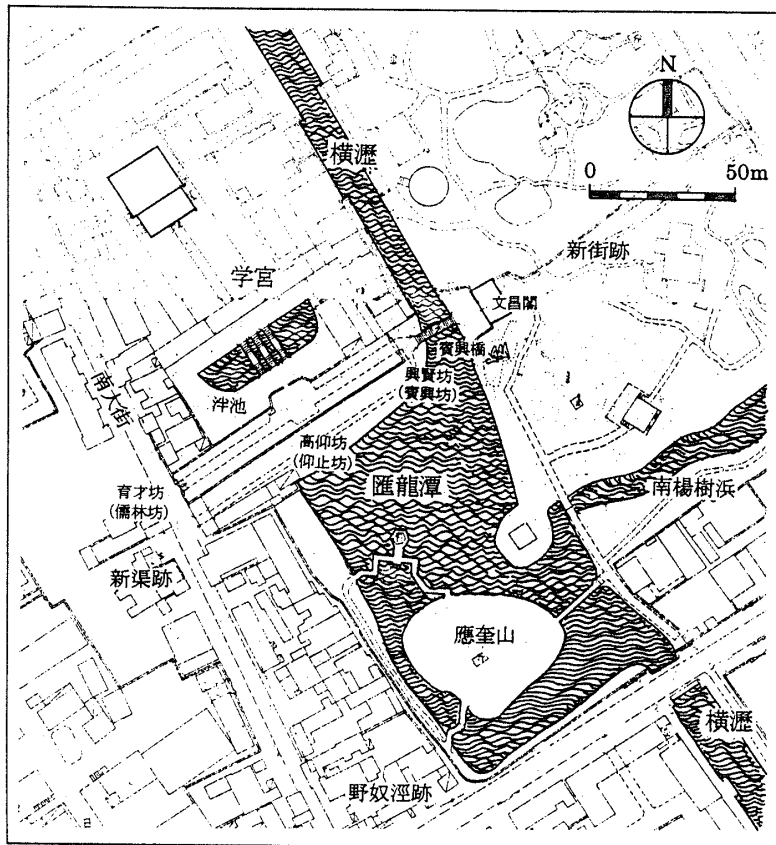


図8 学宮付近の現状図

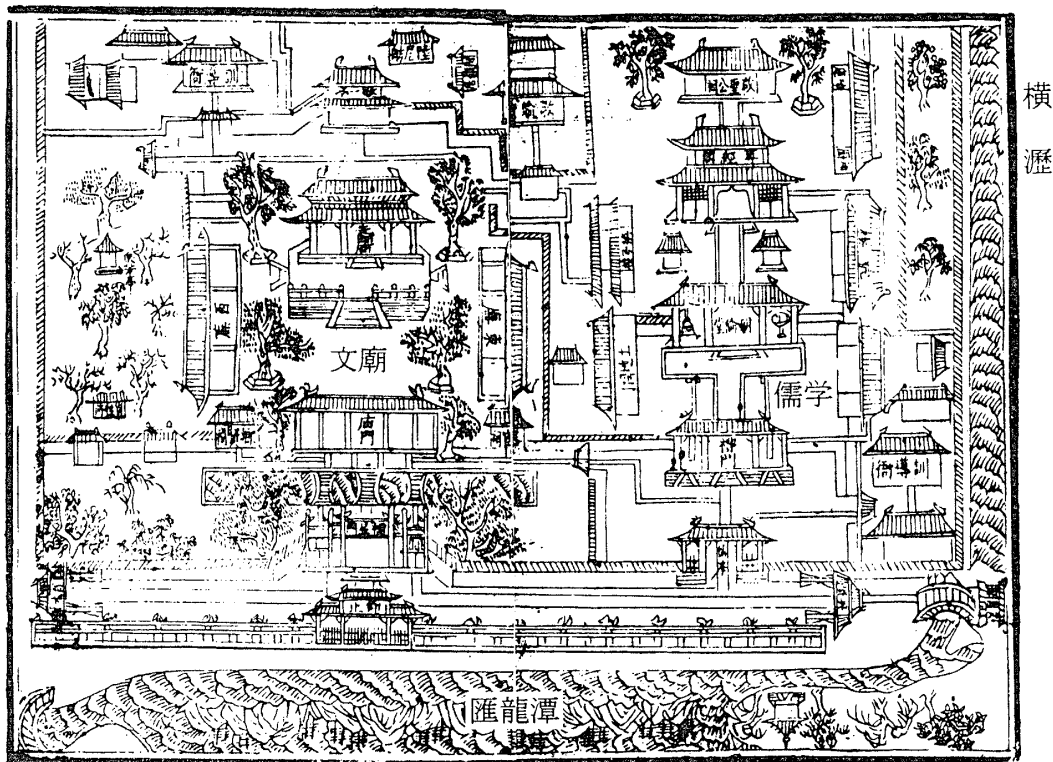


図9 万曆『学宮図』(万曆『嘉定県志』所収)

(石造の欄干) でつないでいる。街路の南側は学宮の数百丈四方の匯龍潭に臨み、西は県城の大通り南大街に通じ、東は賓興橋を越え、迂回して城隍廟前の登瀛橋に至る(図4参照)。学宮東に横瀝が接し、学宮南隅でやや門前方向に横瀝を引き込んで匯龍潭に通じさせている。すなわち、都市主要水路の一部を学宮が専用化していたとすることができる。



写真5 学宮の専用街路(画面右方は学宮, 1997年, 筆者撮影)

このように、嘉定県城の公共的施設においては、その門前の水路と街路空間が専用化されていたこと、あるいはその構内まで水路を引き込んで生活用水路として利用していたことが分かる。また、そのような専用化に応じて水路の対岸の街路は迂回路として橋を通じて密接な関係にあったと指摘することができる。

さらに、明代の万暦以前という比較的早い時期に学宮と城隍廟の間にそれらを専用に結ぶ主要街路(新街)が形成されていた(図4参照)ことも、街路の専用化の一つの形態として注目することができる。

### 水路と街路の筋のずれ

ところで、万暦『嘉定県志』所収の『県城図』(図4)にも示されているように、練祁塘と横瀝が交差するところ(南横瀝と北横瀝の分節点)に筋のずれがみられ、それに並行して街路(南大街と北大街)にも筋のずれが生じている(図5参照)。このずれは少なくとも明代の後期には定形化していたと考えられる<sup>28)</sup>。水路と街路に同等なずれが見られるので、県城の創築時に計画的にずれを生じさせたものと考えられる。

この水路の交差点(写真6)は、古くから練祁市の中心地であって商業的な埠頭が集中し、往来の船の溜まり場(明清時代ではこの付近はもっと広い水路幅であったらしい)であった。嘉



写真6 練祁塘と横瀝の交差点(画面中央右寄りの橋は登龍橋, 左の橋は徳富橋, 1997年, 筆者撮影)

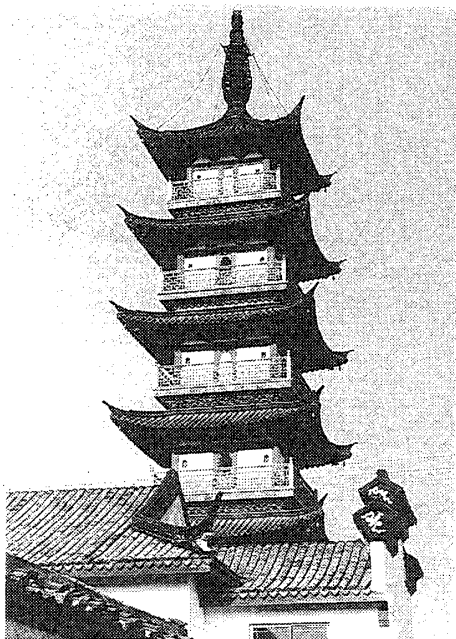


写真7 法華塔（腰檐と高欄は復元，1997年，筆者撮影）

定は潮の干満の影響で水が常に流れているため、水路の交差点においては一層流れが速いものとなる。このような水流を緩和するために屈曲した水路を形成したのではないかと推測される。なお、嘉定県城の水路は曲がりくねるものが少なくない。そして街路は直線的なものも多いが、一部は水路に沿って大きく湾曲するものがある。これらの微妙なずれや曲がりによって、各水路や街路からの視界の終点（いわば道標）は、城の中心に位置する法華塔（写真7）へ集まるようになってきている。したがって、法華塔を中心とした都市空間が意図的に計画されていた可能性が指摘できる。

## 城市

嘉定県城の市は、城内の登龍橋（州橋）付近と城外の四つの城門付近に形成されている。民国の『嘉定県統志』（巻一，市鎮）によると、城市（城内の市）はすなわち宋の練祁市で、建県時に全境（県城）の中心、また全城の中心を占めており、練祁塘と横瀝の交差するところにあたる（図5，写真6参照）。縦横の二つの大街がこれを貫き、法華塔院の南北、県治の東より宝慶橋（通称東浦橋）に至る一帯は最も繁盛している。特に朝市が賑やかで、貿易は日用の必需品が多く、大宗（大規模な商取引）の輸出入の特産品は少ない。冬の城隍祠（廟）や火神祠の報賽演劇の際に、郷民が必ず綿や稲を持ってきて、入城して集観し、歳が豊作になれば人々が喜んで、嫁娶などのために皮裘服物器用などの嫁入り道具を購入し、市況は年中最も盛んである<sup>29)</sup>という。

清代末期の城市は、宋の練祁市を引き継いだものであり、主として十字港の界隈に集中していることが分かる。また、その交易の内容は日常の生活用品が主であって、冬の祭り際には周辺郷民向けの商品を取り扱っていたらしい。

## 附城水市

一方、城市とは別に各城門付近の水路沿いには附城水市が形成されていた。それらは城市とは性格が異なるものである。

民国『嘉定県統志』（巻一，市鎮）に、当時の西門付近は米販売の集散地であって、釣橋から西の高義橋まで、街道が3里(1500m)余り続き、練祁河の南岸に沿って虬橋の西ま

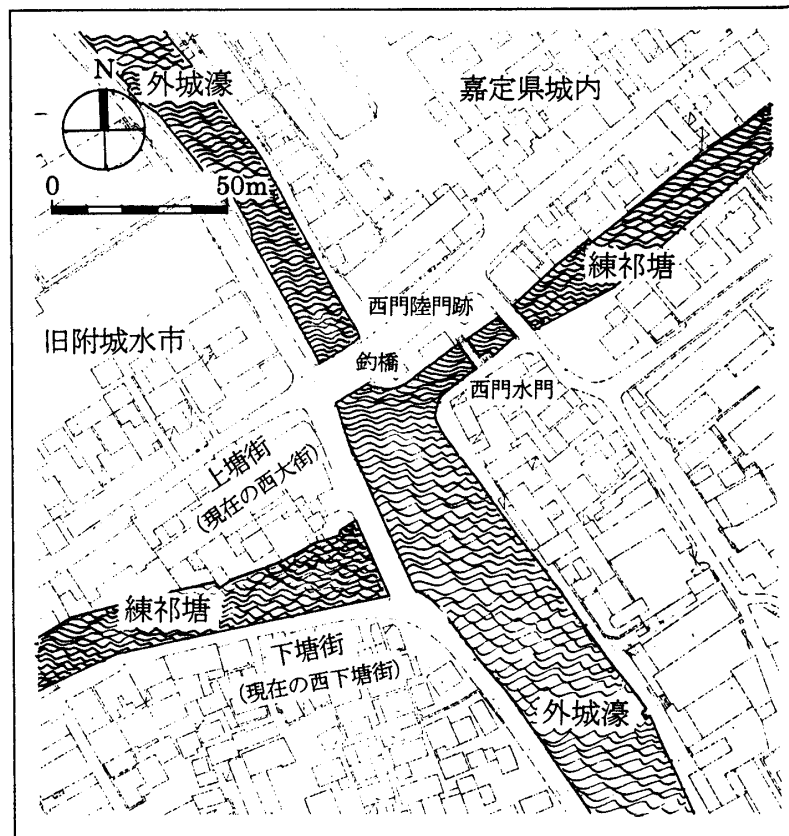


図10 西門付近の現状図



写真9 西門外の旧附城水市 (1997年, 筆者撮影)

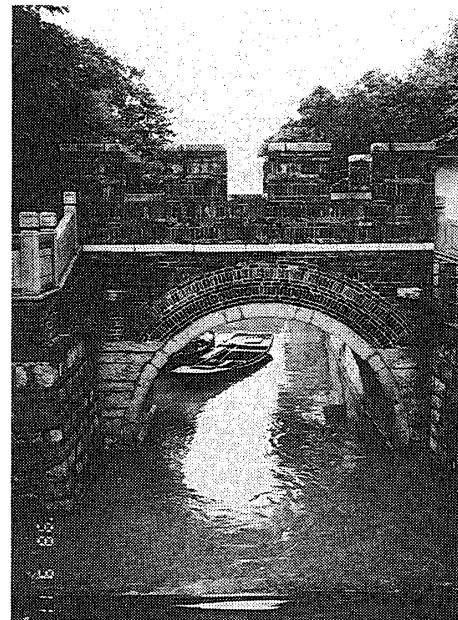


写真8 西門水門 (水門上の女牆は復元, 1998年, 寺地遵撮影)

で街路の1里余りに、大小250から260の商店が並んでいる。この釣橋から虬橋の上下塘あたりが最も盛んである<sup>30)</sup>という (図10, 写真8, 写真9)。西門の附城水市に比べると規

模が5分の1ぐらいであるが、南門付近にも附城水市があった。東門と北門にも小規模な附城水市があった。

また、万暦『嘉定県志』（巻十八、雜記・寺觀に所収の『邑人徐学謨重修殿宇募建橋梁碑記』<sup>31)</sup>に示されたように、当時の西門外の附城水市はほかの四門のものを凌ぐ繁盛を見せていた。

ところで、万暦『嘉定県志』（巻二、疆域考下・津梁）によると、県城の地域において建立時期が最も早い橋は、西門外の項涇（南北方向）と練祁塘の合流点付近にある香華橋（護国寺前）や項涇橋（練祁寺西）であって、いずれも梁の天監年間（502—519）に建造された寺院の前の橋であった<sup>32)</sup>ことが分かる。したがって、そこは県城創築以前に練祁市と相似する立地条件いわば十字港を有しており、寺院の門前に水市が形成されていたと推測できる。城壁が造られてからも引き続き附城水市として存在したことになる。要するに、西門外の附城水市の発達は、比較的早い時期に水市として成立した背景があり、後世に建設された城壁などによる人為的な水市の分断にもかかわらず、従来の水上交通の利が生かされ、長い間繁盛を続けたものと考えられる。

このように、嘉定県城の附城水市は、明代の中後期においてすでに形成されていた。そしてこれらの附城水市の市況は、城内の市をはるかに超えた規模を有していたことが分かる。また、このような市の分布状況は近世江南水郷地帯の県城の典型的な空間構造を表わしたものと考えられる。

## 2. 都市空間の形成要因としての風水思想の影響

嘉定県城は、政治都市の性格を有するため、儒教的秩序に基づいて新たに計画された都市であるが、一方では県城成立時から風水思想<sup>33)</sup>の影響がみられ、明代以降の風水思想の全国的な隆盛に応じて、それに基づく嘉定県城の都市空間の改変がみられる。

たいてい風水といえば、周囲に山や川があるといった自然環境に関するものであるので、従来、周囲に山のない水郷地帯の都市と風水との関り合いについてはほとんど論じられてこなかった。嘉定の場合でも、周辺地域においても山がみあたらない一面の平野である。

しかし、このような周囲に山がなく平坦な土地は、生氣が留められないため風水に欠陥があると見なされていたらしいので、風水思想を考慮した都市形成が存在したはずである。すなわち、県城の創立時から生氣を留める風水改善の手段として、城壁の形状や城門の配置、そして高く聳える塔の存在などが関わっていたと考えられるのである。そして、橋の築造や個々の公共施設の配置などにおいても風水思想の影響が指摘でき、特に明代においては県の科挙の文運を開くためにたびたび学宮周辺の環境を風水思想に基づいて改修してい



たことが分かった。以下にそれを記したい。

### 風水塔としての法華塔

嘉定のような平坦な地形を改善するために、塔を建てることは非常に意味のあることである。先が尖った塔は地下に流れている龍脈を吸い上げる効果があると信じられ、いわば風水塔である。嘉定の法華塔（写真6，写真7参照）は仏塔として県城創築以前に建てられたものである。それは練祁市の中心、水路の交差点という特殊の立地からして、前述したように水上交通との関りが深く道標としての役割があった。ところで、県城創築時にそれを県城の中心に置くことは、万曆33年（1605）成立の『嘉定県志』（巻十八，雑記・寺観）に「形家（形勢を重んじる風水家）はこの塔を県治の文筆，学宮の玄武となす」<sup>34)</sup>と記されているように風水塔としての意味を持たせたものと推測される。少なくとも万曆36年に塔が修復された時点では、このような風水上の配慮があったと考えられる。

### 円形城郭

嘉定県城が前述したような円形城郭を採用した理由としては、文献上の記載がないため判然とはしていなかった。短時間で築き上げるために周囲最小の円形を採用したとするいわば短絡説（米倉，前掲論文）も考えられるが，江南水郷地帯の上海県城，青浦県城などの例が見えることから，ある種の共通する事由があったと思われる。すなわち，この地域の独特な地理的条件や風水思想などが関わっていたと考えられる。嘉定の土地は高阜（古岡身地帯）で土気が旺盛であり，それを生かすために土（方形）ではなく金（円形）が用いられ，風水上の相生がねらいであったと考えられる。

### 城内の空間構成の不均衡

万曆『嘉定県志』の『県城図』（図4参照）には城内の空間構成の不均衡がみられる。主要な公共的施設は西北と東南の両区域に集中して配置されていることが分かる。西北においては，「県治」や「察院」，「兵道」，「教場」，「三賢寺」など公的施設に占められ，県城の政治都市の性格がよく表されている。一方，東南区域では「文廟」，「書院」，「関王廟」，「土谷祠」，「集仙宮」，「積善寺」といった儒学，道観，仏寺などが集中的に配置されている。しかし，東北区域はわずか「城隍廟」と「小学」のみであり，西南区域は「玄壇廟」と「養濟院」がある<sup>35)</sup>。これは，風水上において東南や西北の方位が好まれる傾向と一致していることが指摘できる。

### 城門（水門）と橋の改修

風水上においては、水口のことの方が大事とされている。それに直接に関っているのが城郭の水門である。明代以前の嘉定県城の城門は、四方に陸門が設けられていたのに対して、十字形の水路にも関わらず水門は東西と南の三方だけであった。北に水門を設けない理由は記載がないため不明であるが、風水上では、北に水門があると生気が漏れることや北の煞気（凶気）が城内に進入する可能性があるとしてされていた。逆に東南（巽）方位は清水（生氣）が満ちており、それを導入するためにその方向に新たに水門を開けたことが注目される。万暦『嘉定県志』（卷三、宮建考上・城池）に、万暦18年（1590）に知県熊密が形家の提言によって、南の水門をやや東側に移設し、匯龍関と名を改めたと記されている<sup>36)</sup>。また、万暦『嘉定県志』（卷二十、文苑所収の『匯龍潭記 徐学謨』）によると、匯龍関の増設は学宮前の匯龍潭の造成（後述する）の一環とされ、南来の清水を引導して県の文運を高揚するためであったという。後の万暦30年に士大夫らの主張で水門を元の位置に戻したとされているが、匯龍関は旧水門として康熙『嘉定県志』も光緒『嘉定県志』も『県城図』（図3参照）に現れており、一旦開いた良い方位にある水門を塞ぐことも容易なことではないようである。

ところで、水口は水門に限らず、広く水路を横切る建造物（例えば橋）に関っている。万暦『嘉定県志』（卷二、疆域考下・津梁）に、古壑溝橋（南水門付近）は万暦31年に住民によって石造に改められたが、南来の清水を関鎖（堰き止め）したので邑城に不利として、木造に改めたほうがよいと形家が言った<sup>37)</sup>という。また、西門外の香華橋の建造は前例とは逆に良いとされていた。すなわち、万暦『嘉定県志』（卷十八、雜記・寺觀所収の『邑人徐学謨重修殿宇募建橋梁碑記』）によると、県城の門は四つで、西が最も盛んであって、ただ、ここの市河が浅狭で、貯水の地がないため、潮汐が吐納され、往々にしてその径（水路）が直にして無情であることを患とし、異時、堪輿家（風水師）は練祁塘の水口を鎮鎖するために橋梁を造ればよい<sup>38)</sup>という。

このように、江南水郷地帯の城郭都市においては、特に風水思想における水口に関する水門の配置や橋の修築などに際して、形家または堪輿家の提言で風水を考慮して都市空間構成が決められたことは以上の地方志の記録にも明らかである。

### 学宮環境の改修

嘉定の学宮は、文廟（西）と儒学（東）からなり、現存建物の大半は光緒年間の再建である<sup>39)</sup>（写真10、写真11）。万暦『嘉定県志』（卷十九、文苑所収の『重修学舎記 王鏊』）に、県学は県治の東南にあり、右（西）側は通衢（白虎）、左（東）側は河横瀝（青龍）、

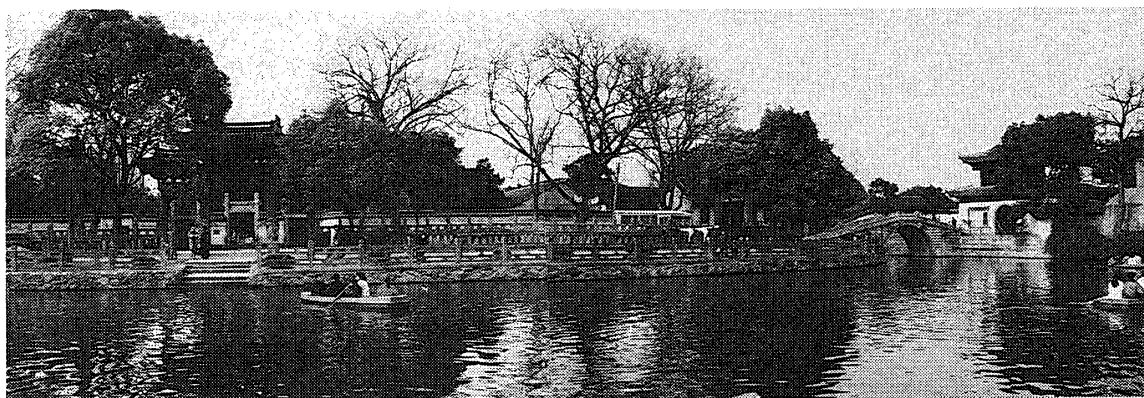


写真10 嘉定学宮正面（画面左方は学宮の専用埠頭・高仰坊・櫺星門，右方は興賢坊・資興橋・文昌閣，1997年，筆者撮影）。

前は土山（應奎山，通称四宜山）があり、松柏が鬱然として河水が巡ると記されている<sup>40)</sup>。また、文廟の南の泮池（朱雀）と北の法華塔（玄武）を加えるとほぼ理想的な風水地いわば四神相応に揃っていることが分かる（図8，図9参照）。このような敷地の環境は南宋嘉定12年（1219）に学宮を創立した当時からある程度整っていた。しかし、明代になると、嘉定の文運を開くために学宮の環境の改修を重ねた。万



写真11 匯龍潭（画面右方は案山應奎山，1997年，筆者撮影）

曆『嘉定県志』（巻三，宮建考上・学宮）によると、洪武6年（1373）に学宮の南に射圃（後の匯龍潭）を開き，天順4年（1460）に知県龍晋がそこに土山（匯龍潭の中の小島）を増築した。正徳元年（1506）に巡按御史饒塘が土山を改築して周囲に水渠を環らした。万曆18年に知県熊密は学宮前の土山が支障であるとし，その位置を少し南へ移して，学宮と土山の間に方数百丈の潭を掘り，名づけて匯龍とした。万曆31年知県韓浚が形家の提言によって，西南の野奴涇と東の横瀝を浚渫して匯龍潭に通ずるようにした<sup>41)</sup>という。

土山が造られた理由としては，万曆『嘉定県志』（巻十九，文苑に所収の『儒学應奎山記 龔弘』）に，山を築き，川を浚渫するのは，その周覽がまだ整備されていないので体裁を整えるためである。留光寺はちょうど前方で抗して撤去できず，ゆえに宋及び元の時代に人材が少ししか出なかったが，天順年間（1457-1464）に邑令龍晋がそれを避けるために山を創築してから，人材は一盛したと記されている<sup>42)</sup>。

匯龍潭が造られた理由については，万曆『嘉定県志』（巻二十，文苑所収の『匯龍潭記

徐学謨)に、嘉定は土気が旺盛であり、水でこれを克するのがよい。且つ城の四門が潮汐を吞吐するが、中にそれを溜めるところがなく、それを急に盈したり急に涸したりして、何で靈氣を溜めて人文を宣揚することができるのであろうか<sup>43)</sup>、という。

そして、野奴涇と横瀝を浚渫することも、万曆『嘉定県志』(巻二十、文苑所収の『重濬学前二渠記 華亭王善繼』)によると、学宮の前に数十歩のところ野奴涇があり、その東南は横瀝と合流し、その会合する様は襟のように左右に分流して環抱し、昔の建学育才はすべてこれらに頼っていた。しかし、現在では土山がまだ高く、二水を合流させることができず、風気が渙して人文が聚らない<sup>44)</sup>という理由があった。

また、嘉靖年間に新築した文昌閣<sup>45)</sup>については、万曆『嘉定県志』(巻三、宮建考上所収の『邑人徐学謨文昌閣記』)に、学宮の前に案山を擁し、旁に民舎を列し、その左隅に官道(新街のこと)があり、経勢(形勢)がやや不属としていて、術者(風水師)はよく龍虎不敵の病があるという。前令は時にその欠如を補うことを議したが、挙げずにいる。諸生が侯(知県)に請い、侯は吾事として、遂に日を選んで命工・鳩材し、累土して三楹(三間)の閣を建て、その下に通路を設けて、往来の民の便利を図った。扁額は文昌として閣の上に飾り、暢然に四顧して、我土がみな喜んでいと記されている<sup>46)</sup>。

このように、学宮は創建時から比較的によい風水に恵まれていた。それは東に水路(青龍)、西に大街(白虎)といった配置関係である。明代になると学宮の南に射圃を開き、土山(風水思想で使われる案山に擬せられていた)が造られ、またたびたび改修され、その後、匯龍潭が造成され、それに通ずる水路も浚渫されるなどのように、文運を開くために惜しみなく風水思想に応じて一連の改修が施されていたことが分かる。さらに法華塔の修復や文昌閣の新築、そして南東の水門の開くことなどがすべて文運に因んだ形家等の提言によるものであった。

### 城隍廟の移転

前述した城隍廟の移転は当時の一大行事に違いない。そこで城の東街に「卜置」されたということにも示されるように風水思想の影響がみられる。もっとも移築先は城内の主要水路練祁塘に近接し、水路は敷地の南で大きく湾曲する形を有しており(図7)、風水学上では生氣が留まる水形で、いわば玉帯水という極上の立地条件に恵まれていたことが「卜置」された主な理由と考えられる。

また、上述した公共的な都市施設だけでなく民間においても、民国『嘉定県統志』(巻五・風俗・信仰)に、人家が営葬及び建屋の際に必ず地師(風水師)を延べて風水を見る。その信仰の深い者は凡そ一門舗を開き、一路を舗装し、一竈を造り、一牀を設けるなど、

すべて風水師にそれらの風水を相度するのが一般的である<sup>47)</sup>という。

このように、江南水郷地帯に立地する都市は、様々な興作で風水上の都合を満たしたのである。そこで県城創建時から重視されたのは、城内の中心に位置する法華塔であり、それを地下の龍脈に通ずるとして風水塔に見立てた。城郭の形状も陰陽調和の手段になった。また、覇業や商業、文運などの発達に因んで特に水口を重視した。それは水門の設置、橋の築造、水路の浚渫などが関っていた。さらに、靈気を留めるために城内に大池が設けられ、重要な都市施設（例えば学宮）は理想的な四神相応の地に建てた。また、風水思想は民間の営造活動の隅々に浸透していた。しかし、一方では士大夫らは、風水思想に従いながらもそれと一線を画すように、自らの採択はあくまでも儒理に適ったものとしていたようである<sup>48)</sup>。

こうして、県城の空間構成は儒教的な秩序をつねに正統な理由として表に揚げながらも、一方、影では形家等の提言を受けて、都市計画や具体的な造営活動（建物の配置や池・水路の浚渫などの環境改修）は風水思想が多大な影響を及ぼしていたことが分かる。特にこの傾向は明代において比較的顕著であったといえる。

#### IV. 結語

中国江南水郷地帯に立地する嘉定県城の都市空間は、南宋建城時にその枠組みが決定され、明代中後期には完成していたと考えられる。その成立は地勢が平坦で潮の干満に影響されるといった独特な立地条件や発達した水上交通が関っており、その背後には風水思想の影響をみることができる。本稿の結論は次の三点に要約される。

- 1) 嘉定県城の成立時には、既存の練祁市を利用したため、城の中心を占めているのは県治ではなく十字港の市であって、そこに従来の水市のシンボルであった法華塔をそのまま存続させるなど独特な都市構造が形成され、その後は変化が少なかったと考えられる。市街は十字形の水路と街路に沿って展開され、街路は水路との位置関係によって性格の相違がみられる。公共的施設においては、門前や構内に水路を引き、水路とともに門前の街路空間を専用化させていた。また、城内の中心部においては、南北方向の水路のずれがみられ、それに応じて街路もずれており、それは潮の流れや港の機能を考慮して、地形の特色を生かしたものと考えられる。特に、円形城壁の採用は陰陽調和といった風水上の考慮があったと推測される。
- 2) 嘉定県城は、対称形に近い形態を有するが、その後の変遷によって都市空間の構成において不均衡現象がみられる。それは、風水思想（特に方位）の影響があったと考え

られる。ところで、城内の市（城市）よりも四方の城門外に形成された附城水市のほうが盛んで、そこにも四門において市街の発達に不均衡現象がみられる。それは、風水思想の影響よりも水上交通や商品流通などによる周辺地域との経済的な関りにあると考えられる。また、その点において嘉定県城の都市空間は一般の江南市鎮とも共通するところがあると指摘できる。

- 3) 明代の万暦年間を中心に行われた塔の修復、城門（水門）と主要水口に架かる橋の改修、そして学宮において案山としての土山の改修、池の新設とそれに通じる水路の浚渫など、都市空間構成に風水思想の強い影響があったことが分かる。

嘉定県城の市街は、城壁が築かれたことによって制約されつつも、水郷都市としての水上交通に依存した独自の都市空間を構成したものである。それは、市街が水路沿いにしか形成されず、水路の交差点または城門付近（附城水市）においては最も盛んであることを指摘することができる。また、こうしてみると、嘉定県城の都市空間は、政治都市＝城郭都市の性格を有する一方、江南水郷地帯に形成された市鎮と相似点が多い。ただし、城郭都市の側面においては、風水思想の影響が頗る強いものであったといえる。

[謝辞]

本研究は、1998（平成10）・1999（平成11）年度文部省科学研究費補助金による基盤研究(c)(2)「近世中国、江南市鎮における水辺都市施設の発達に関する総合的研究」（代表者：寺地 遵、課題番号：10610354）の成果の一部である。なお、本稿の作成にあたり、広島大学文学部教授、広島大学総合地誌研究資料センター研究員寺地 遵先生の指導を得たことに感謝したい。

注

- 1) 県城とは県治（県庁）が置かれる地方都市で、それに対して、その上位には地域の主要都市である府城（または州城）、その下位には城壁を持たない中小都市の市鎮がある。
- 2) 古岡身とは、長年にわたって長江が運んできた土砂により嘴状に発達した自然堤防である。それによって海が限られて皿状の湿地太湖平原の主体が形成され、さらに古岡身の外側にも土砂の堆積で太湖平原の周縁部が形成された。古岡身の幅は約8 kmで、その外縁は横瀝の流域（現在嘉定県の婁塘、嘉定城区、石岡、馬陸、南翔などの一帯）にあたり、太湖平原の古海岸線である。嘉定は古岡身地帯に設置された最初の県治である。
- 3) 米倉二郎「中国江南の城鎮－嘉定を中心として」（『集落地理学の展開』、大明堂刊、1987年）
- 4) 鈴木充・盧永春「水郷都市嘉定の歴史－日中水辺建築空間の比較研究(-)」(『日本建築学会学術講演梗概集』、1995年)、盧永春・鈴木充「水郷都市嘉定の水辺建築空間－日中水辺建築空間の比較研究(二)」(『同』、1995年)
- 5) 堀込憲二「風水思想と都市の構造」(『思想』No.798、1990年第12号、岩波書店)
- 6) 「嘉定十年歳在丁丑秋九月（中略）作新邑于練祁之匯」(万暦『嘉定県志』巻一、疆域考上に所収の

- 【宋知縣高衍孫創縣記】、「就練祁要會之地，置立縣治，以嘉定為名」（同所収『宋知府趙彥纘提刑王秉請創建疏』）。
- 7) 「嘉定初置縣，本百家之聚耳」（万曆『嘉定県志』卷三，宮建考上）
- 8) 「法華塔院，在城一函，登龍橋南，宋開禧中建元至大元年僧道堅重修（中略）今（明万曆33年）尚存一級，俗名金沙塔」（万曆『嘉定県志』卷十八，雜記・寺觀）
- 9) 「登龍橋，俗名州橋，宋淳祐五年（1245）」、「耆英橋，在儒學後，嘉定中（1208－1224）」、「寶興橋，在儒學前，宋淳祐九年」，「拱星橋，在圓通寺西，宋嘉定十二年」，「登瀛橋，旧名熙春，在城隍廟東，宋嘉定中」，「廣平橋，在新巷口，咸淳四年（1268）」，「北保安橋，在澄江門内，紹定元年（1228）」，「南保安橋，在澄江門内，紹定元年」，「倉橋，在拱星之西，端平元年（1234）」
- 10) 「宋嘉定十二年知縣高衍孫始築縣城，塹以壁」
- 11) 「嘉定邑有五鄉，而往時以歲儲漕糧十余萬，故不以鄉而以四倉領之，民忘其鄉矣」
- 12) 「元貞詔下，劇邑率陞州，嘉定以戸口計，應中州之制，遂陞焉」（万曆『嘉定県志』卷十九，文苑に所収の『建州治記 教授貢松』）
- 13) 「元翰林學士承旨吳興趙孟頫圓通寺碑」（万曆『嘉定県志』卷十八，雜記・寺觀）
- 14) 「沿河左岸塹以石，五十余丈」（万曆『嘉定県志』卷三，宮建考上・學宮）
- 15) 「周一千六百九十四丈，崇一丈五尺，基廣四丈面三丈，為門四，東曰晏海，西曰合浦，南曰澄江，北曰朝京今改觀潮東南三水門附焉，外濠去城五丈，廣十三丈，深一丈，内塹廣二丈，深一丈」
- 16) 洪武『蘇州府志』所収の『嘉定県界図』は，嘉定県城が円形城郭であることや城内の公共施設の配置關係を初めて示した史料である。ところで，この図は，北側の水門の存在や南側の水門の位置などについては不正確な点もみられる。
- 17) 「海防庁，在縣治東，旧為察院行臺（中略）嘉靖三十二年以島夷内躡，督撫張經請特設防海郡丞一員專駐本縣乃改為庁」（万曆『嘉定県志』卷三，宮建考下・公署）
- 18) 「三十二年倭入犯知縣萬思謙以土堞難守，改塹以壁，周二千二百六十六丈六尺，崇二丈六尺，基廣五丈，面三丈，凡五閏月告成，萬以遷秩去東南新築毀于霖雨，知縣楊旦重塹，改置雉堞二千三百六十九，加崇四尺，分塹敵臺一十六座，守舖三十四，於是城四門各建樓一座，廣東北二水關及子城，脩西南二門子城，增築東門子城，外濠重加疏濬，深廣有加工，始于癸丑十月，訖于丙辰六月，先後凡三年邑人徐學謨為之記」
- 19) 「中囊井廬，外襟江海，而東南諸城爭雄嘉定矣」（卷三，宮建考上・城池『邑人徐學謨築城記』）
- 20) 「蘇之嘉定去郡城百四十里，東瀕于海，其野衍沃而亢，鄉聚以鎮，名十有六，其最大曰南翔，曰婁塘，曰羅店，戸率千五百有奇，其次曰大場，曰江灣，曰高橋，曰月浦，曰真如，曰安亭，戸半之，其次又曰廣福，曰黃渡，曰紀廟，曰外岡，曰葛隆，曰楊行，曰徐行，亦三百余戸，水陸之會，商賈器集，俗重貨」
- 21) 明清時代には，城内の水路は練祁塘と横瀝のほか，小水路が14本ある。それらは南西側の野奴涇・何家浜・新渠，東南側の唐家浜・崇文浜・邢家浜・楊樹浜，東北側の清鏡塘・飯飲浜，西北側の清鏡塘・呂壑涇・西庫涇である。しかし，都市の近代化が進むにつれ，交通手段の変遷によって元来の水路は徐々に機能しなくなり，現在は練祁塘（練祁河）と横瀝（横瀝河），そして環状の城濠（外城河）が残っているだけである。
- 22) 『吳趨訪古録』卷7，嘉定（清・姚承緒撰，姜小青校点，江蘇古籍出版社1999年8月）には「相傳宋元間，本是瀕海地。商舶待卸帆，立此為表識」と記す。
- 23) 小街には巷と，さらに小さな街がある。
- 24) すなわち埠頭である。一般的には水埠，河埠などと呼ばれている。その主要設備は水路へ下りる階段（水階）である。
- 25) 現在はすでに取り壊され，その跡地は商店街や公園などとなっている。
- 26) 万曆『嘉定県志』（卷三，宮建考下・廟宇）に「城隍廟，在縣南富安坊宋嘉定間建，国朝洪武二年知縣胡永安移建縣治東」や「城隍廟，旧在邑治南百武許，国朝卜置城之東街」と記す。
- 27) 侯旭「城隍廟」（余永林・趙春華主編『嘉定掌故』，31頁，學林出版社1988年）
- 28) この水路の交差点には登龍橋（西）・徳富橋（南）・寶慶橋（北）・濟川橋（東）という四つの橋が架かっており，これらの橋はいずれも万曆年間に存在しており，したがって水路のずれはその頃まで遡

- ることが分かる。
- 29)「城市，宋練祁市建縣時占全境之中心，又占全城之中心，為練祁橫瀝交匯處，縱橫兩大街貫之，塔院南北，縣治以東至東浦橋一帶，最繁盛，早市尤殷闊，貿易多日用品，少大宗輸出入特產品，冬月城隍祠，火神祠報賽演劇，鄉民棉稻畢登，入城聚觀，歲豐人樂，經營嫁娶，採購皮裘服物器用之屬，市況之盛為全年最」
- 30)「西門，釣橋東堍沿城濠南北，有木行兩家，營業頗旺，自釣橋以西至高義橋，街道長三里余，沿練祁河南岸至虬橋西，街道長一里余，大小商店二百五，六十家，以釣橋至虬橋上下塘一帶為最殷盛，每日一市，貿易物自日用品外以棉花，米，麥，蚕豆，黃豆，布繭，六陳，豆餅，竹木，牛皮之屬為大宗，市況向極繁盛，尤為米商萃蓄處，洪楊役後大衰，光緒初年以來漸復從前盛況」，「南門，光緒二十年前，布經市極盛，城內吳三房最著，城外業此者十余家，遠自劉河浮橋，近則一，二十里，內外布經買賣集於此，辰聚西散，熙攘竟日，紗場巷即以排紗成經得名，自洋紗盛行不數年間，無復有布經營業而市況頓衰，由釣橋南至紗場巷商店四，五十家，沿河花米行，豬行各業亦迭盛迭衰，唯後起之毛巾織廠營業較旺」，「北門，釣橋以北，商店二十余家，街道不及半里，每晨有小貿易花布，六陳之類，相傳洪楊兵事前市街直達皇慶寺（城北三里）」，「東門，自城根迤東，沿練祁北岸街道長里許，向為布經市場，自洋紗盛行，市遂衰落，商店二，三十家，雖不甚熱鬧，仍有花行，木行各大商肆，而哺坊之營業較發達」
- 31)「護国教寺，位当邑之西鄙門，臨練祁之水，漕艘商舶之所畢集，故治城之門四，而西為最」
- 32)「香華橋，在護国寺前，梁天監中建，萬曆三年更建石橋」，「項涇橋，在練祁寺西，梁天監中建」
- 33) 風水思想とは，中国古来の天人合一や陰陽五行の宇宙論的発想から，あらゆる造営活動において自然環境が人間社会の活動に及ぼす影響を想定し，最良の対策を講じることを主眼とする理論や方法のことである。具体的には，敷地の形勢と方位を選択または人工的に改良することによって，最適な環境を形成することである。
- 34)「形家以此塔為縣之文筆，学之玄武」と記す。塔は県治の南，学宮の北にあるので二重の意味合いを持っているようである。
- 35) しかし，それらの施設にしても東北と西南の方位は外してある。
- 36)「萬曆十八年知縣熊密以形家言，移南水門于稍東，更名匯龍關」
- 37)「古壑溝橋，萬曆三十一年居人鑿石，形家言關鎖南來清水不利邑城，仍宜改木」
- 38)「治城之門四，而西為最盛，顧惟市河淺狹，瀦水無地，潮汐吐納，每患其徑直而無情，異時，堪輿家或言宜為梁練祁之口，鎮鎖之」
- 39) 嘉定区博物館編『嘉定区文物普查資料概覽』（1993年）
- 40)「縣学在縣治之東南，右距通衢，左距河橫瀝也，前有土山，松柏鬱然，而河水，滌之」
- 41)「(洪武六年) 關射圃 (中略) (天順四年知縣龍晋) 增築学南土山 (中略) 正徳元年巡按御史饒塘改築土山，購奇峯樹之，環疏為渠 (中略) (萬曆) 十八年知縣熊密以学前土山為障，夷其址之十七，濬之為潭，方廣數百丈，名匯龍 (中略) (三十一年知縣韓浚) 以形家言濬西南野奴涇，蜿蜒入匯龍潭，東鑿土山導橫瀝滌廻其下，架木梁跨之」
- 42)「若山之可築，川之可濬，乘其周覽未整□者，為之此裁成輔相之功 (中略) 留光寺適抗前方，莫能撤去，是故有宋及元人材間出，我国朝天順間邑令吉水龍晋始築山障之，人材為之一盛」
- 43)「夫嘉固土重之邑也，宜以水克 (中略) 且城之四門吞吐潮汐而中無所瀦，令其驟盈驟涸，則何以儲靈氣而宣人文也」
- 44)「学宮之前数十步有野奴涇，東南趨于橫瀝，会合如襟左右分流環抱，昔之建学育才蓋取諸此 (中略) 山因益高，終不能使二水之合也，風氣渙而不聚人文」
- 45) 文昌閣は，学宮の東南隅にある寶興橋（別名青雲橋）東詰めに，新街を跨って建てられ，現存建物は近年の復元である。
- 46)「学宮前擁案山，旁列民舍，其左隅以官道，所經勢稍不属，術者每以龍虎不敵為病，前令時議補其闕，竟未獲舉，乃諸生以請于侯，侯曰吾事也，遂戒日命工鳩材累土建閣三楹，虚其下以便民之往来者 (中略) 扁之曰文昌，像於閣之上，暢然四顧，我土咸喜」
- 47)「人家營葬及建屋必延地師看風水，其信仰深者凡開一門鋪，一路砌，一竈排，一牀，均須倩若輩為之相度」



- 48) 万曆『嘉定県志』に「山之考極相方，自北徂南見出吾儒理（中略）與堪輿家所謂大逕庭焉」（卷十九，文苑『儒学應奎山記 壘弘』）や「張叟者故非形家，而言則形家之上理也」（卷二十，文苑『匯龍潭記 徐学謨』）と記す。

## 文 献

- 盧熊輯（明・洪武年間）：『蘇州府志』（静嘉堂文庫蔵）。  
韓浚修（明・万曆33年）：『嘉定県志』。  
趙涇修，蘇淵纂（清・康熙12年）：『嘉定県志』（静嘉堂文庫蔵）。  
程其珎修，楊震福等纂（清・光緒6年）：『嘉定県志』（嘉定区博物館蔵）。  
陳傳徳修，黄世祚纂（1930）：『嘉定県統志』。  
余永林・趙春華主編（1988年）：『嘉定掌故』学林出版社。  
米倉二郎監修（1987年）：『集落地理学の展開』大明堂。

## A Study on Urban Space of the County Capital of Jiadin with the Theory of Fengshui

Yongchun LU\*

This paper makes clear characteristic of the urban space under the early modern times of the county capital of Jiadin(嘉定) which is located in the region of canals (or rivers and lakes) of Jiangnan(江南) in China. Mainly on the influence of the theory of Fengshui(風水). And so it gains consideration based on the literal document and the practical investigation result of the place.

The main structure of the county capital of Jiadin was built in 1217. I think that the city wall, the main urban facilities and so on might be completed approximately in the late Ming period and they have been kept without changing since then. I also think that the tide of the canals which is seen in Jiadin outer place of the Gugangshen(古岡身) in the Changjiang(長江) delta area, might influence urban space.

About the urban study of Jiangnan, there are many studies on Suzhou(蘇州), the main big city in the area and on market towns in the outskirts of Suzhou. However, as for the county capital, which existed between them in size, though it is the core of politics, culture and economy in the area, it has not collected attention. There was an only approach by Dr.Yonekura in 1987 on the point of village geography. As for the composition of the urban space, I have ever made a couple of paper. As for the influence of the theory of Fengshui, a study report on the cities which seat in the mountain zone is seen, but in the region of canals of Jiangnan there has been no study yet.

The built-up area at the county capital of Jiadin may have composed the unique urban space depending on the traffic on water as the port town although having agreed by circumvallation. As for it, I could point out that, the built-up area is formed only along the waterway and on the intersection point of the waterway or at a port town attached to the city near a castle gate, was the most prosperous. Also, Considering like this way, The urban space at the county capital of Jiadin has the character of the politics city = the castle city, whereas there are many analogous points as port towns

which were formed by the region of canals of Jiangnan. But on the point of the castle city, it is possible to say that it was strongly influenced by the theory of Fengshui.

It is the Fahua (法華) pagoda situated on the center of the castle that they thought significant from the time of the prefecture castle establishment, and they considered it as the Fengshui's tower. The shape of the castle also became the means of the positive and negative harmony and they thought Shuikou (水口) important especially for the development such as the supreme industry, the commerce and the luck of Keju (科举 official selection). As for that, the establishment of a water gate, the construction of a bridge, the dredge of a waterway and so on were considered.

Moreover, a big pond was provided into the castle to fix a spirit and the important urban facilities (e.g. the Xuegong = 学宮) made up the place of ideal 4 gods aspect. Also, the theory of Fengshui thought penetrated all kinds of the building activity of the civilian.